
[成果情報名] ヒリュウ台温州ミカン「大津四号」の早期樹冠拡大のための結果開始時期
[要約] ヒリュウ台温州ミカン「大津四号」の1年生苗を定植後3年目から結果させると樹冠拡大が著しく抑制されて果実品質も劣るのに対して、定植後4～5年目から結果させると早期に樹冠の拡大が図れる。

[キーワード] 温州ミカン、大津四号、台木、ヒリュウ、結果開始時期、樹冠拡大

[担当部署] 果樹部・果樹栽培チーム

[連絡先] 092-922-4946

[対象作物] 果 樹

[専門項目] 栽 培

[成果分類] 新技術

[背景・ねらい]

温州ミカンのわい性台木ヒリュウは、従来のカラタチ台木に比べて省力化と高品質化が同時に図れる台木として本県でも導入が進められている。しかし、ヒリュウ台を用いた場合、早くから結果させると初期の生育が抑制されやすく、生産性向上のためには未結果期間の幼木時にできるだけ樹冠の拡大を図った後に結果させることが重要である。

そこで、ヒリュウ台「大津四号」について、定植後から結果開始までの年数が幼木の樹冠拡大や収量、果実品質に及ぼす影響を調査し、早期成園化のための技術確立を行う。

[成果の内容・特徴]

- 1．ヒリュウ台「大津四号」の1年生苗を定植後3年目から結果させると樹冠拡大が著しく抑制されるのに対して、定植後4～5年目から結果させた場合は、5年目に樹高が180～200cmに到達して早期に樹冠拡大が図れる（図1）。
- 2．定植後5年目までの1樹当たり収量の累計は、3～4年目の結果開始に比べて5年目から結果開始させた方が少なくなる。また、樹冠容積当たり収量は3年目から結果させた場合が多くなる（図2、一部データ略）。
- 3．定植後3年目から結果させると果実品質の年次変動が大きく、定植後4～5年目から結果させた場合に比べて、果皮の着色が劣り、糖度も低く、結果初期の果実品質が劣りやすい（表1）。

[成果の活用面・留意点]

- 1．ヒリュウ台温州ミカンの幼木時の管理技術資料として活用できる。
- 2．苗定植後から3年目までは全摘らい、全摘果を行ってできるだけ樹冠の拡大を図り、樹高180～200cmを目安に4～5年目から結果を開始する。

[具体的データ]

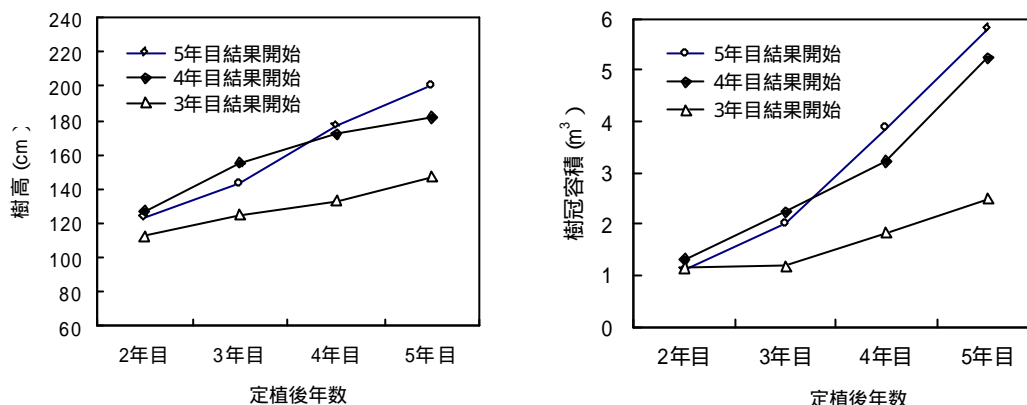


図1 ヒリュウ台「大津四号」の定植後から結果開始までの年数と樹高・樹冠容積
 注) 1. 結果開始年数は平成11年3月に1年生苗を定植してから初結果までの年数
 2. 各試験区とも株間2mで定植し、結果開始後は葉果比30を目安に摘果を実施

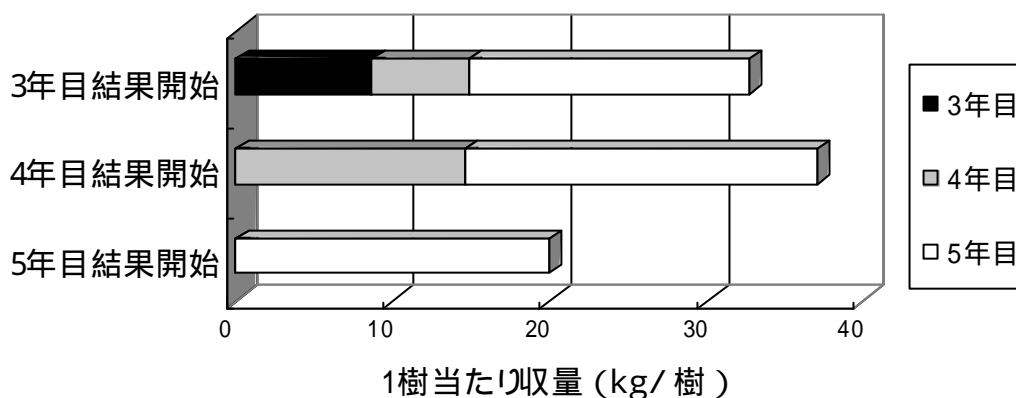


図2 ヒリュウ台「大津四号」の定植後から結果開始までの年数と収量

表1 ヒリュウ台「大津四号」の定植後から結果開始までの年数と果実品質

結果開始 年数(年)	果皮色			果実重(g)			糖度(Brix)			クエン酸(g/100ml)		
	3年	4年	5年	3年	4年	5年	3年	4年	5年	3年	4年	5年
3	6.6	3.0	7.3a	161	217	175ab	10.6	9.7	11.5a	0.83	1.09	0.99a
4	-	7.4	7.3a	-	160	182a	-	11.5	11.7a	-	0.95	0.97a
5	-	-	7.3a	-	-	159b	-	-	11.4a	-	-	0.98a
		**	NS		*	*		*	NS		NS	NS

注) 1. 果皮色はカンキツ用カラーチャート(農水省果樹試作成)の測定値
 2. Tukeyの多重検定により、異文字間は5%水準で有意差あり
 3. t検定、F検定により、*は5%水準、**は1%水準で有意差あり

[その他]

研究課題名: ヒリュウ台での早期成園化・栽培技術およびマルチ栽培での少資材化技術の確立

予算区分: 国庫助成(地域基幹)

研究期間: 平成15年度(平成11~15年)

研究担当者: 矢羽田二郎、牛島孝策、松本和紀、巢山拓郎